



■ 教会標語 ■ 『聖書に聴く喜びを大切にしよう』
 主の2020年4月12日
 第103号 イースター号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
 牧師 上田 真由美

〒590-0114 堺市南区槇塚台 1-1-5
 TEL/FAX 072-291-9532
 izumigaoka9532church@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝 (日) 午前10時30分
- ・ 教会学校 (日) 午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会 (木) 午前10時30分
- ・ キリスト教講座・家庭集会
- ・ マリヤ会・テモテ会、他

「主はアブラムに言われた」(一節)。人生の旅は、「主は言われた」から出発します。神様が私たちの人生の主であるからです。主なる神様が私たちの人生に関してお考えを持っておられて、ちゃんと私たちの行く所を定めて送り出される。私たちはそのお考えに一切を委ねて旅立つ。それが信仰です。そういう意味で、私たちの人生は自然に任せるのが一番よいと考えるのは聖書と違う考えでしょう。

ある人々は、「一節の「故郷」・「父の家」、つまり「大事なもの」を離れ主の示すとおりに行けと言われ

創世記十二章一〜九節

祝福の源となる

牧師 上田真由美



るのは厳しい人生に入ることだと言います。そうでしょうか。というのは、もう次の二節から、主の「祝福」の約束が繰り返されているからです。「わたしはあなたを祝福する」、「あなたを祝福する人をわたしは祝福する」、「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」。主が言われるとおりに行く人生は実は厳しい人生に入ることではなく「祝福に入る」ことなのです。

それでは「祝福」とは何でしょう。世間にも祝福があるでしょう。たとえば、仕事を通して自分を信頼してくれる人がいる、あるいは自分が信頼できる人がいる、それが祝福

る

でしよう。そうならば、神様から信頼していただき、自分も神様に信頼する、そういう神様との間に親しい関係ができる。それがまず「祝福」であり、これほど大きな祝福はないはずです。

ここで私たちは心配になります。自分は神様に背いている弱い人間だから、神様から信頼していただけないかもと。しかし神様から信頼していただけるかどうかは、自分自身の状態によって決まることではないでしょう。神様は私たちが立派だから私たちが救ってくださったのではない。私たちは神様に背いているのに、神様は私たちが救ってくださったはずです。これほど私たちが人間に接近し関係してくださる、御子イエス様によって。それなら、ただ神様があなたを救うと言われた、その《神の言葉》に従って行く以外には何も心配する必要はないのです。弱い私たちであっても神様は信頼してくださる。そして私たちは神様に信頼してその信頼は裏切られることはない。そういう意味で神様と親しくなる、それが祝福です。

次に、アブラム自身が大きいなる民の「祝福の源となる」、つまりアブラムは人々に祝福を与える者として用いられる、それが「祝福」です。「祝福の源となる」それは私たちのことでもあります。私たちを通して他の人が祝福を受けようになる。そこまで行かなければ祝福はないのです。聖書にそう書いてあるからです。「あなたは祝福の源となる」。

「祝福の源となる」というと、私たちがはいわゆる幸福な人生が展開すると思うかもしれませんが。しかしアブラムの人生は、息子イサクの奉献があったり、甥ロトが大変な目に遭ったり、そういう苦労のある人生でした。私たちの人生も同じではないでしょうか。しかしその中でアブラムがただ《神の言葉》を信じ抜いた。その一事が今日の私たちにとってさえ、祝福の源になっています。ですから、私たちもまた、《神の言葉》に従って行くことによって、他の人に祝福がもたらされて行きます。命が満ち満ちて行きます。現代に生きる私たちは、この命は主イエスの身代わりの十字架そして復活によつ

てもたらされたことを知っています。救いに満ちた命がこの地上に満ちましたが、「祝福」です。言ってもよいでしょう。

アブラムが主なる《神の言葉》に従って旅立ち、そしてカナンに入った時にまた「主は言われた」（七節）とあります。その《神の言葉》を聞いて、彼はすぐ何をしたかと言うと、「祭壇を築きました」（八節）。礼拝の準備をし、主なる神を崇めたのです。

神様に一切を委ねる人生の旅と礼拝の旅は別々ではありません。アブラムは後にどこへ旅立つことになっても、祭壇を築いて主なる神を崇めたことでしょうか。それが、神様に一切を委ねる生活の仕方なのです。

